

〔PR〕



## 「正直」からはじまる地域とのつながり 暮らして感じる神恵内村の魅力

NUMO（原子力発電環境整備機構）は、原子力発電の使用済燃料をリサイクルする過程で発生する高レベル放射性廃棄物の最終処分を行う組織。NUMO では北海道の寿都町と神恵内村で文獻調査を進めており、2024年2月には両町村の文獻調査の結果を取りまとめた報告書の原案を国の審議会に提出し、現在（4/11 取材時点）、国が内容を審議している状況にある。このような状況の中、今回は NUMO の地域交流部 神恵内村グループの木村友洋さんに話を聞いた。

見るからにエネルギーな木村さんは、NUMO 神恵内交流センターに所属する新卒入構3年目の若手職員。神恵内村の魅力を一言で表すならと聞いた際にはこんな答えが返ってきた。「人の良さ、景色の良さ、食べ物のおいしさ。神恵内村の素晴らしい一言で表現するのはとても難しいです。そんな神恵内村の魅力を多くの人に伝えたいですね」

神恵内村に赴任して1年が経とうとしている木村さん。ニコニコと嬉しそうに神恵内村のことを話す表情、それを見るだけでこの村で暮らす満足度の高さを感じることができた。新人村民の木村さんが感じる神恵内村の魅力はどのようなものだろうか。

### 地域との関わりを求めて NUMO へ

一歩目は、学生時代の木村さんが出会った日本国内に高レベル放射性廃棄物の最終処分施設が無いという事実だった。それを皮切りに国際共通の処分方法は「地層処分」であること、日本では最終処分を NUMO が担っていることを知る。

「NUMO を調べていくと、地域との交流を行う部署があり、そこでは主に地域に根ざした活動を行っていると思いました。もともと地域と関わることは好きだったので、原子力などの専門知識はなかったのですが、NUMO の地域交流部を志望することを決めました」

最終面接で木村さんは、地域交流部への配属と現地への赴任を希望し、1年の東京本部勤務を経て2023年5月に神恵内村へやって来た。はじめての北海道、しかも都市部ではない神恵内村、難しさはなかったのだろうか。

「私が赴任する2年前に神恵内交流センターが立ち上がって、先輩の NUMO 職員が地域の人たちと交流していたので、私が来たときにはコミュニケーションの土台が出来上がっていました。先輩たちが誠実に交流してくれていたから、スムーズに地域に溶け込めたと思います。ただ、雪は大変でした。雪が降る場所に住んだのは初めてだったので、最初は本当に楽しかったです。でも、すぐにこれは大変なことだと気づきました（笑）」

神恵内村の冬は厳しい。ただ、その冬もいつかは終わり春がやってくる。冬が厳しければ嬉しいほど春を迎える喜びは大きいのもかもしれない。



### 村民にとっての日常生活こそが魅力

神恵内村の住民となって1年となる木村さんに、神恵内村の魅力を聞いた。「人ですね、皆さんすごく優しいんです。本当にいい人ばかりで、昨年のゴールデンウィークに赴任したんですが、すぐに受け入れてくれました」

それまで緊張しているように見えた木村さんだったが、神恵内村の魅力を話すときはとても饒舌になった。村内で開催されるイベントに快く受け入れてくれたこと、ソフトボールチームに所属していること、人事異動のシーズンに住民と話をすると「転動しちゃうの？」と心配そうに聞かれたのがどこか嬉しかったこと。

印象的だったのは、今回の取材で木村さんと少しだけ街の中を歩いたとき、住民が木村さんに声を掛ける、木村さんはそれに笑顔いっぱいであげる。たった5分の間にそんなやり取りが何度かあり、木村さんがいかに神恵内村に溶け込んでいるか感じられる場面だった。「あと、おすすめの季節は夏ですね。ウニ、ホタテ、牡蠣をはじめとする海の幸。美しい景色も堪能できますし、お祭りなどのイベントがたくさんあります。それと真夏でも水道水が冷たいんです。これには驚きました」

住んでいる側には当然なことでも、神恵内村歴1年の住民にとっては新鮮なことばかり。木村さんが日々味わう感動は、そのまま神恵内村の魅力だ。



絶景！旅行村から望む日本海の夕日



絶品！行列のできる勝栄船のおまかせ寿司

### NUMO 職員として地域と関わる

NUMO の交流センター職員として神恵内村の住民になった木村さんの今の仕事を聞いた。「文獻調査の状況を分かりやすく資料にまとめて、2カ月に1度程度開催される村と共同で設置した『対話の場』で村民の皆さまに広く説明します。ただ、皆さま全員に来ていただけるわけではないので、『対話の場』が終わったら内容の説明と、その中で出てきた議論をまとめた報告資料を作り、全戸訪問で皆さまに説明します」

木村さんをはじめとする神恵内村グループのスタッフは、直接対話を基本にしたコミュニケーションを取り、自分たちで分かることはその場で回答し、分からないことは持ち帰って確認してから住民に伝える。

「分かっていることはより分かりやすく。分からないことは分からないと素直に伝えて調べろ」シンプルに正直に。文字にするのは簡単だが、それを日々続けるのは簡単ではない。木村さんは地域の中でそれを実践し続けている。

「この村も、この村の人も好きなんです。正直に伝えることが今の私にできる神恵内村への貢献だと思っています」

### どんな局面でも基本は「正直」

現在、神恵内村の文獻調査は進み、今年2月には NUMO で作成した文獻調査の報告書を国の審議会に提出し、審議が開始されている。それが正式な報告書となれば、その報告書の内容を地域に伝えていく。

「国の審議会での議論が終わり、正式な報告書となると、神恵内村で法律に基づいた説明会を実施することになります。そうすると調査結果などをより踏み込んで説明することになります」

この報告書は、文獻調査から概要調査へ進むことについて村民の皆さまにご判断いただくための重要な資料であり、今まで以上に地域住民の理解度を上げる必要がある。そして、それを説明する木村さんをはじめとする地域交流部の理解度も、大きく上げていかなければならない。

「私たち自身が今よりもっと理解度を深めていくのは当然ですが、それをお伝えするということの難易度も上がっていくと思います。ただ、難易度が上がったとしても『正直に』という基本は変わりません」

どんな局面でも木村さんの基本は『正直に』ということだ。今、行われている調査を可能な限り等身大で伝えていく姿勢は常に変わらない。

### 村人になることが自分ごと化の鍵

文獻調査の報告書作成が最終局面に入り、求められることも多くなっている中、木村さんに今後の目標を尋ねると、こんな言葉が返ってきた。

「東京にいた時は、文獻調査にご協力いただいている神恵内村という意識でした。調査にご協力いただいているという気持ちに変化はないのですが、神恵内村の住民の一人として『村のことを考える』という視点が加わりましたね」

美しい村という普遍的な魅力を持つ神恵内村だが、解決しなければならない「人口の減少」「公共交通機関の縮小」などの課題も数多く存在している。

「住んで1年の私が言うのもおこがましいのですが、神恵内村の魅力を発信して、神恵内村のまちづくりについても考えたいと思っています。一人の住民としてそういうことを村の皆さまと一緒にやっていきたいですね。もう NUMO 職員というのは置いて（笑）」

NUMO 職員として地層処分に関する調査をサポートするためにやってきた若者は、神恵内村の人たちとふれ合い、神恵内村の活動に参加し、神恵内村の魅力を発見し続けている。その表情は村のことを自分ごとで捉える一人の村民そのものだ。

原子力発電環境整備機構 (NUMO) <https://www.numo.or.jp/>

地層処分を分かりやすく紹介している動画はこちら

[https://www.numo.or.jp/chisoushobun/what\\_movie.html](https://www.numo.or.jp/chisoushobun/what_movie.html)

〔取材ライターのおすすめ〕

### 神恵内村の夏を満喫できるイベントを紹介！

#### 沖揚げまつり



例年7月第一日曜日に開催。村民による伝統の太鼓やソーラン節の演奏のほか、神恵内村で親しまれている「沖揚げ音頭」も披露される。また、出店では神恵内村ならではの海の幸をふんだんに使ったグルメを提供。中でもウニ餅は朝から行列になる沖揚げまつり名物として知られている。

#### 厳島神社例大祭



毎年7月14～16日に開催。国指定の無形民俗文化財に指定されている「松前神楽」のほか、大行列で村内を練り歩くみこし行列も行われる。中盤に行われるみこしをほぎながら海に入る「海中禊（みそぎ）」のほか、神社境内の坂に火をつけ、みこしを担いで渡り切る「火渡り」は大きな見どころ。

#### 神恵内魅力まつり



例年8月下旬に開催。古くから神恵内村で親しまれてきた「神恵内音頭」の復活、地域や世代間の交流を目的に2013年から開催されているお祭り。数々の出店のほか、ビアガーデンや練日コーナーなども催される。村民の7割近くが来場するという神恵内村の一大イベント。

※2024年度の開催は未定です。

北海道神恵内村 <https://www.vill.kamoenai.hokkaido.jp/>